
[成果情報名] カキ「秋王」の環状はく皮処理による着果率向上

[要約] カキ「秋王」は満開 20 日後に主幹部や主枝基部へ 3mm 幅の環状はく皮処理を行うことにより着果率が向上する。果実品質や日持ち性、樹勢への影響はない。

[キーワード] カキ、秋王、環状はく皮、着果率、樹勢

[担当部署] 果樹部；果樹育種チーム、苗木・花き部；苗木チーム

[連絡先] 092-922-4946

[対象項目] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

本県で育成されたカキ新品種「秋王」は大果・高糖度で食味が優れており、カキの生産振興を図るための本県オリジナル品種として、産地への導入が進められている。しかし、着果が不安定であるため、ジベレリン処理による着果対策を行っているが、条件により効果が不安定な場合がある。そこで、着果率向上のため、環状はく皮処理の効果について明らかにする。

(要望機関名：久留米普 (H25・H28)、園芸振興課 (H25・H26)、飯塚普 (H25))

[成果の内容・特徴]

1. 満開 20 日後に主幹部や主枝基部へ 3mm 幅の環状はく皮処理を行うと、樹勢の強い樹や気象条件の悪い年でもジベレリン処理よりも着果率は高くなる (図 1、2、一部データ略)。
2. 環状はく皮処理では、果実品質に大きな差はみられず、日持ち性も同等である (表 1、一部データ略)。
3. 健全樹では環状はく皮処理による樹勢の低下はみられない。処理翌年の雌花着生数に影響はなく、雄花の着生もみられない (表 2)。

[成果の活用面・留意点]

1. カキ「秋王」の結実対策技術として活用できる。
2. 環状はく皮は、満開 20 日後に主幹部や主枝基部に 3mm 程度の幅で行い、処理後にはテープを被覆することで癒合を促進させ、枝幹害虫に処理部を食害されないようにする。
3. 樹勢の弱い樹、樹齢 5 年生未満のものや幹周 20cm に満たないものは樹勢低下を招く恐れがあるため処理を控える。

[具体的データ]

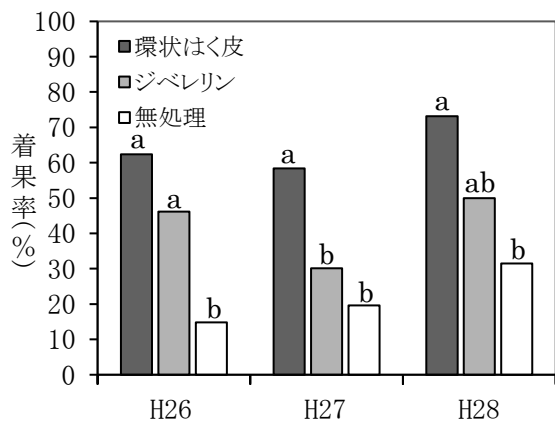


図1 環状はく皮処理が「秋王」の着果率に及ぼす影響（平成26～28年）

- 注) 1. 平棚仕立て（株間4m×列間4m）、平成26年時樹齢5年生、満開70日後に調査
 2. 環状はく皮処理は満開20日後に主幹部に3mm幅で実施。ジベレリン処理は満開10日後に200ppm水溶液を幼果およびへたに散布
 3. 摘蕾は5月上旬に1枝2蕾で実施
 4. 異英文字間には5%水準で有意差あり (Tukey法)

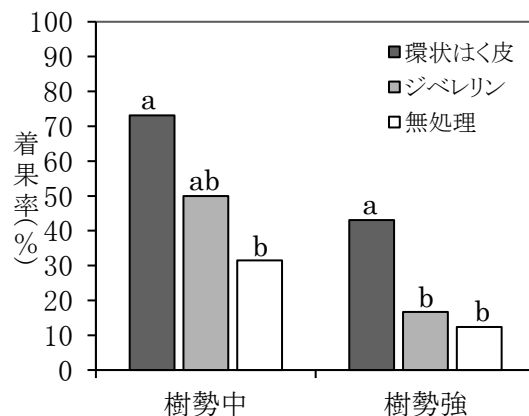


図2 樹勢の違いが「秋王」の着果率に及ぼす影響（平成28年）

- 注) 1. 樹勢中は樹齢7年生、樹勢強は「富有」中間台に平成22年に高接ぎ、満開70日後に調査
 2. 樹勢強の環状はく皮は満開20日後に主枝基部に3mm幅で実施。その他の処理方法および栽培条件は図1に同じ
 3. 異英文字間には5%水準で有意差あり (Tukey法)

表1 環状はく皮処理が「秋王」の果実品質に及ぼす影響（平成26～28年）

試験区	果実重 (g)	果皮色 (赤道部cc)	果頂裂果 (0-4)	果肉硬度 (kg)	糖度 (Brix)
環状はく皮	393	5.8	0.6	1.20	16.8
ジベレリン	361	5.2	0.5	1.27	15.8
無処理	338	5.3	0.2	1.27	16.3
有意性	ns	ns	ns	ns	ns

- 注) 1. 供試樹、処理方法および栽培条件は図1に同じ
 2. 分散分析によりnsは有意差なし

表2 環状はく皮処理が「秋王」の処理翌年の着蕾に及ぼす影響（平成27～28年）

試験区	H27			H28		
	着蕾数		頂芽新梢長 (cm)	着蕾数		頂芽新梢長 (cm)
	雌花	雄花		雌花	雄花	
環状はく皮	12.9	0.0	31.2	10.6	0.0	25.5
ジベレリン	11.0	0.0	36.3	5.9	0.0	26.9
無処理	12.9	0.0	36.2	5.4	0.0	23.8
有意性	ns	ns	ns	ns	ns	ns

- 注) 1. 供試樹、処理方法は図1に同じ、着蕾数は処理翌年の4月下旬に調査
 2. 分散分析によりnsは有意差なし

[その他]

研究課題名：カキ新品種「秋王」の早期成園化および結実安定技術の開発
 予算区分：県特（かき新品種普及拡大事業）
 研究期間：平成28年度（平成26～28年）
 研究担当者：朝隈英昭、白石美樹夫、松本和紀、奥村 麗